

## 地域連携型授業の実践報告

— 世田谷区尾山台商栄会商店街振興組合との連携授業を通じて —

Report on the Practices of College and Regional Partnerships

- Through Collaborative Classes with *Setagaya-ku Oyamadai Shoeikai*  
Shopping District Promotion Association -

岩 崎 眇

Satoru Iwasaki

齋 藤 勇 二

Yuji Saito

長 島 弘

Hiroshi Nagashima

**抄 錄** 自由が丘産能短期大学（以下、本学と記す）において 2011 年度に世田谷区尾山台商栄会商店街振興組合との地域連携型授業を実践したクラスについて、授業の実践内容、学生と商店街それぞれの取り組み成果と今後の課題について報告をする。本学では「大学の学びの基礎能力」「働くための基本技能」「ビジネス実務能力」「現代社会を生きる力」の 4 つの能力開発を基軸とする教育課程を体系的に編成し、教養科目と専門科目を調和的に結合し、正課学習と正課外学習を連携させることにより、学生の能力開発を実現する教育プログラムを実践している。2 年生の必修科目である「課題実践研究Ⅰ・Ⅱ」は主に「現代社会を生きる力」を開発するプログラムの中核として位置づけられる科目であり、課題解決型の学習手法である PBL をもとに組み立てられている。この科目において学外から受注したいわば「生きた」課題に体験的に取り組んだ地域連携型授業の成果として、学生は交流、行動、協働、思考の力を伸ばすことができたと認識している。一方、商店街は当初期待していた地域住民と商店街をつなぐ「媒介者としての役割」と「客観的な視点」に加え、地域住民に対する商店街の改善意欲の伝達や個店の意識変革の醸成に寄与したと考えている。

**キーワード** 地域連携 PBL 体験学習 働く基本能力

regional partnership, problem-based learning, project-based learning,  
experience learning, basic skills for job readiness

1. はじめに
2. 授業科目の位置づけ
  - 2.1 教育課程における本授業の位置づけ
  - 2.2 学習目標とクラステーマ
3. 尾山台商店街との連携
  - 3.1 商店街との連携経緯
  - 3.2 商店街が期待すること
4. 連携型授業の実践内容
  - 4.1 街頭調査実践クラスの内容
  - 4.2 パソコン教室実践クラスの内容
5. 取り組み成果に関する考察
  - 5.1 学生の学習成果
  - 5.2 商店街における実践効果
  - 5.3 連携型授業を支える要素
6. 今後の課題

## 1. はじめに

本報告は、2011年度の本学の2年次必修科目である「課題実践研究Ⅰ・Ⅱ」のクラスのうち、世田谷区尾山台商栄会商店街振興組合（以下、尾山台商店街と記す）との地域連携型授業をおこなった二つのクラスについて、その授業の内容、尾山台商店街との連携の内容、学内の他部門との連携の実態、学生や商店街の反応について報告するとともに、今後の課題について考察したものである。

## 2. 授業科目の位置づけ

### 2.1 教育課程における本授業の位置づけ

本学においては4つの能力開発を基軸とする教育課程を体系的に編成している。4つとは「大学の学びの基礎能力」「働くための基本技能」「ビジネス実務能力」「現代社会を生きる力」であり、教養教育と専門教育を調和的に結合し、正課学習と正課外学習を連携させ、それを実現する教育プログラムを展開している。

また、本学の学習実践においては「自ら問いを発して考え、行動し、仲間とともに課題に真剣に取り組み、共に学びを深める」ことを目指している。

本報告において取り上げる地域連携型授業は2011年度に「課題実践研究Ⅰ・Ⅱ」科目内でおこなわれた。この科目は、本学の教育課程において「現代社会を生きる力」の実践化を図る教育の中核として位置づけられているとともに、課題解決型の学習手法であるPBL(Problem-Based Learning/ Project-Based Learning)をもとに組み立てられている。

PBLは、課題解決の方法を具体的な問題事例に即して体験的に学ぶ学習法で、1960年代

に医学教育の手段として実用化されたものである。学生の主体的学びを促進し、課題解決能力、コミュニケーション能力、コラボレーション能力などを身につけさせることに効果があるとされ、その後、看護学、コンピュータサイエンス、工学、社会科学、人文科学等の分野でも活用されるようになった。

課題の設定に関しては、課題設定自身を学生に委ねるケースと、課題は教員が提示するケースがあり、本学においては主に後者で実施している。

「課題実践研究Ⅰ」は2年次の前期必修科目、「課題実践研究Ⅱ」は2年次の後期必修科目である。

本学の教養科目や専門科目で学んだスキルやマインドを発揮して、実社会の課題に体験的に取り組み、PDS(Plan-Do-See)のマネジメントサイクルを実践することにより、実社会で他者に働きかけながら自分を役立てる力を育成することを目指す、いわば2年間の短期大学士課程における学習の集大成科目である。

また、この授業をおこなうクラスのうち9クラスは学外から受注したテーマに取り組む地域連携型クラスである。周辺地域で派生する実社会の生きた課題に体験学習として取り組ませることに特徴がある授業である。

### 2.2 学習目標とクラステーマ

2011年度「課題実践研究Ⅰ・Ⅱ」科目の学習目標は次の4点である。

(1)地域の商店街、NPO団体など学内外から受注したテーマの達成に真剣に取り組み、全体的な動きをとらえ、小課題に気づき、工夫して解決できる。

(2)働くための基本能力(自ら課題に真剣に取り組む力、チームの中で自分の力を発揮する協働力、現場の課題を創造的に解決する力)を課題実践の場面での的確に応用できる。

(3)課題実践研究を通じて、働く基本能力に関する自らの学びの目標を設定できるようになる。

(4)チーム活動に積極的に参加し、チーム活動上の問題に向き合い、ともに解決に向けて行動できる、である。

クラスは27名前後で構成され、コース混合のメンバー編成のため、初対面の仲間との協働が必要となる。

2011年度に学外から受注したテーマに取

り組む地域連携型クラスは全部で9クラス設置された。内訳は地域団体の業務支援系クラスが4クラス、地域パソコン教室実践系クラスが5クラスである。各クラスの取り組みテーマ、連携先(=発注者)、主な内容は図表1の通りである。

### 3. 尾山台商店街との連携

#### 3.1 商店街との連携経緯

尾山台商店街との連携には、2名の方の存在が大きく関わっている。本学周辺地域において高齢者・障害者向けのパソコン教室を実施していたT氏と、このパソコン教室の参加者であった尾山台在住のM氏である。

地域連携型クラスのテーマ・連携先・主な授業内容(図表1)

	テーマ	連携先(発注者)	主な授業内容
1	短大生の視点から、尾山台商店街のさらなる振興・発展のための調査、提案をおこなう。	世田谷区尾山台商栄会商店街振興組合	商店街を往来する地域住民や買物客への街頭インタビューと焦点観察を実施し、調査結果を考察して提案する。
2	地域交流業務支援(商店街振興組合業務支援)二子玉川商店街	世田谷区二子玉川商店街振興組合	商店街ガイドの取材・作成、イベントの広報資料作成と参加など、インタビューやパソコンを活用した地域支援業務を実践する。
3	地域交流業務支援 地域商店街・地域団体のパソコン活用支援	本学周辺の福祉団体・商店街・市民活動団体	世田谷区、目黒区内における各種団体に対し、ポスターやHPの作成支援や案内映像、広報用印刷物の制作を支援する。
4	尾山台・等々力・自由が丘周辺の福祉団体の業務支援	社会福祉法人「はる」など本学周辺の医療・福祉支援団体	本学周辺の医療・福祉支援団体から広報資料作成等の業務を受注し、要望に沿った資料作成を支援する。
5	地域交流業務支援(パソコン教室) 商店街向けパソコン教室	世田谷区尾山台商栄会商店街振興組合	発注者の要望に沿い、商店街顧客、地域住民を対象としたパソコン教室を企画・運営する。
6	地域交流業務支援(パソコン教室) 商店街向けパソコン教室	世田谷区尾山台振興会商店街振興組合	発注者の要望に沿い、商店街の方、地域住民を対象としたパソコン教室を企画・運営する。
7	地域交流業務支援(パソコン教室) 自治会パソコン教室	世田谷区桜新町親和会	町会活動の一環として、町民を対象としたパソコン教室を共同で企画・運営をする。
8	地域交流業務支援(パソコン教室) NPO団体・地域住民向けパソコン教室	たまがわ楽しくパソコンと遊ぶ会(たまばそ)	発注者と連携して、高齢者向けパソコン教室の企画・運営をする。
9	地域交流業務支援(パソコン教室) 世田谷区地域住民向けパソコン教室	世田谷区肢体不自由者パソコン指導協会	発注者と連携して、パソコンサポーターとしての参加や講習会を開催する。

PBL型授業の企画中に、東深沢中学校において毎月第2土曜日に高齢者・障害者向けのパソコン教室を開催していたT氏と面識を得ることができた。その際に本学授業との連携を持ちかけ、T氏の実施しているパソコン教室に本学の学生がアシスタントとして参加するとともに、学生が企画運営するパソコン教室も他の期間に実施することとなった。

その後、このパソコン教室の参加者であったM氏から、同様の取り組みを尾山台商店街でも実施できないかという打診を受け、尾山台商店街の理事と協議の上、連携の運びとなった。M氏自身はこの商店街の構成員ではないが、地域のボランティア活動を積極的におこなっている方であり、尾山台商店街からの要請に基づいて商店街振興のためのアドバイザーの役割も担っている。尾山台エリアは立地の上でも本学から徒歩30分弱と近い場所にあり、地域への貢献という観点からも適切であると考え、新たに二つの連携クラスを設けることとなった。

尾山台商店街は、大井町線の二子玉川駅と自由が丘駅の間にある尾山台駅の南側に位置し、大井町線路から環状八号道路に至るまでの街路を中心エリアとする商店街である。尾山台駅の約1km圏内に約1万4千世帯、3万人が居住している。また、尾山台駅の1日平均利用者数は約2万6千人である。

世田谷区のショッピングプロムナードモデル事業の指定を受け、1988（昭和63）年に完成した。近隣の古墳から出土した銅鏡をモチーフにしたモザイクを配置した入り口のアーチや御影石を敷き詰めた石畳が商店街のシンボルとなっている。2010（平成22）年現在の組合員数は144、店舗の業種構成は物販

57、その他87である。毎年10月には各種地域団体と連携した商店街イベント「尾山台フェスティバル」を開催している。また、個店共通ポイントカードシステムを導入し、利用額に応じて付与されたポイントを買い物の支払いに充当するだけでなく、食事会や抽選会に参加することができる仕組みを導入し、振興を図っている。

近年、尾山台駅脇に生鮮食料品、一般食料品、酒類、日用雑貨などを販売する中規模のスーパーマーケットが出店してきたため、住民の買い物経路が変化しつつあることへの危機感も感じている。

また、近隣には尾山台振興会商店街振興組合、二葉会商店会、尾山台東栄会の3つの商店街があり、これらの商店街とも連動しつつ地域の街づくりと商店街の活性化を模索している。

### 3.2 商店街が期待すること

現在、尾山台商店街は尾山台駅周辺の他の3つの商店街と連動して、魅力的な買い物環境づくり、安全安心で快適な環境づくり、尾山台らしさを感じられる楽しみや雰囲気のある街づくりによる地域密着型の商店街を目指している。

そのためには個店の魅力向上や街並みの整備、交通環境の改善、情報発信機能の充実などの商店街自身が取り組むべき課題に加え、地域住民や団体との関係性強化を図り、これらと一体になった体制づくりが防犯力・防災力の強化やイベント企画の運営などを進める上で不可欠である。特に地域団体としては町会やおやじの会、NPO法人とともに大学等の教育機関に期待しており、これらの団体と連

携して企画や運営を協力しておこなう仕組みづくりを推進したいと考えている。

このような地域全体の活性化を目指す商店街の基本方針に連動して、尾山台商店街と地域住民（もしくは買い物客）がより良好な関係性を構築するために、本学学生に対して期待することは、その間を繋ぐ架け橋の役割を担うことである。

さらに、本学の学生のほとんどがこのエリアの住民ではないため、中立で公平な企画運営をおこなえるという点である。このいわば「媒介者としての役割」と「客観的な視点」が尾山台商店街からの期待の根幹をなすものである。

このため本学としては、学生がグループワークを中心とした正課内授業を通じて身につけたコミュニケーションスキル、インタビュースキルや焦点観察スキルなどのフィールドワーク力、パソコンスキルなどを最大限に活かせる企画の立案、運営を尾山台商店街と連携しておこなうことでその期待に応えていくことを考えた。

一つは尾山台商店街における街頭インタビュー調査の実施である。尾山台商店街は世田谷区と連携して区民アンケートを実施し、あらかじめ用意された選択肢をもとにした定量的なデータを集約することはできているが、地域住民もしくは買い物客の生の声の吸い上げが体系的にできていなかった。そこで、直接利害のない第三者の本学学生が媒介者となって街頭インタビューをおこなうことで、尾山台商店街に対して日頃から感じている要望や忌憚のない意見などの定性的な情報をより多く収集し、学生の考察も含めフィードバックをおこなう。これにより、当事者に直接語

りにくい遠慮のない意見集約もおこなえ、尾山台商店街としての振興策や改善策の構築の一助となると考えた。

もう一つは前述のM氏からの要請を受けて尾山台商店街のIT委員会と連携して地域住民のためのパソコン教室を開催することである。特にパソコン初心者の高年層の周辺住民を対象に、本学学生がインストラクターを担う教室を商店街エリア内の会場に設けることにより、住民のパソコンスキルの向上に貢献するのみならず、商店街として文化発信機能の強化や語らいの場としての魅力作りに寄与し、足を運んでいただく機会も増えると考えたからである。

二つの活動は2009（平成21）年から開始し、2011（平成23）年で3年目となる。

#### 4. 連携型授業の実践内容

次に2011（平成23）年度に実践した二つの連携型授業の内容を報告する。

##### 4.1 街頭調査実践クラスの内容

###### ①テーマ

短大生の視点から尾山台商店街のさらなる振興・発展のための調査、提案をおこなう。

###### ②概要

授業の内容は、尾山台商店街における街頭インタビュー調査と焦点観察調査を企画立案し実施、その結果と考察内容を報告書にまとめ、発注者である尾山台商店街の理事長に最終報告と提案をおこなうことである。

###### ③授業の進め方

このクラスはビジネスマネジメントコース、秘書コース、観光・国際コースの学生の混成メンバー合計27名で構成され、活動期間は2011年4月から2012年1月までである。

街頭調査実践クラス授業日程表（図表 2）

前期	授業日	授業項目	後期	授業日	授業項目
1	4月11日	前期オリエンテーション	1	9月26日	後期オリエンテーション
2	4月18日	事前フィールド観察	2	10月 3日	街頭調査の実施
3	4月25日	事前学習・情報収集	3	10月10日	街頭調査の実施
4	5月 2日	調査企画の構想作り	4	10月17日	調査データの集計
5	5月 9日	調査企画の構想作り	5	10月24日	調査データの集計
6	5月16日	調査企画の構想作り	6	10月31日	調査結果の考察
7	5月23日	企画提案準備	7	11月 7日	調査結果の考察
8	5月30日	企画提案準備	8	11月21日	調査報告書の作成
9	6月 6日	企画提案会の開催	9	11月28日	調査報告書の作成
10	6月13日	調査の設計（計画）	10	12月 5日	報告会開催準備
11	6月20日	調査の設計（計画）	11	12月12日	調査報告会の開催
12	6月27日	街頭調査リハーサル	12	12月19日	活動評価とまとめ
13	7月 4日	街頭調査の実施	13	1月16日	チーム・個人振り返り
14	7月11日	街頭調査の見直し	14	1月23日	後期のまとめ
15	7月25日	前期のまとめ	15	1月30日	全体総括

グループ活動を中心に、調査内容を計画立案する plan のプロセス、調査を実践し報告する do のプロセス、活動内容の振り返りをおこなう see のプロセスのマネジメントサイクルを実践する体験学習をおこなった。

また、学生による授業運営組織として、調査グループと役割グループのマトリックス組織を設定し、一人が二つのグループに属することにより最低でも二役の職務を担いつつ、学生の自発的な運営により授業を進めた。教員はファシリテーターに徹した。

前期においては、4 つの調査グループ（1 グループから 4 グループまで）と 4 つの役割グループ（総括グループ、総務グループ、提案会運営グループ、提案書作成グループ）を組織した。後期は 4 つの調査グループと 5 つの役割グループ（総括グループ、総務グルー

プ、報告会運営グループ、報告書作成グループ、調査分析グループ）を組織した。これにより、各リーダーを中心にグループ間で相互に密接な連携をとらないとスムーズな授業運営がおこなえないばかりでなく、グループの担当領域の狭間に位置づけられた仕事に対しても前向きに取り組む必要がある環境を設定した。

前期の活動としては、まず、事前学習として我が国における商店街の役割、特徴、機能、今後の課題などについてグループ学習をおこなった。その後、対象商店街である尾山台商店街の予備観察調査を実施し、調査の仮テーマ設定、調査の狙い、調査の課題などを整理した。合わせて調査スケジュール案の作成や関連情報の収集をおこなった。これらを調査企画書としてまとめ、企画提案会を開催した。

その後、この提案会の意見交換も踏まえ、調査設計を修正し、最終的なインタビュー設問項目、留意点、焦点観察ポイントをまとめ、クラス内リハーサルを実施の上で第1回目のインタビュー調査・焦点観察調査を実施した。

後期に入り、第2回目、第3回目のインタビュー調査、焦点観察調査を実施し、合計3回のフィールド調査結果の集計をおこなった。この集計結果をもとに、集約意見の考察をおこない、学生の視点からの提言をまとめ、その内容を報告書にまとめた。さらにこの報告書をもとに調査報告会を開催した。最後に個人ワークの振り返り、グループワークの振り返りをおこない全ての研究プロセスを終了した。具体的な授業日程は図表2の通りである。

また、活動の成果物としての調査報告書の内容項目は図表3の通りである。

#### 調査報告書内容項目（図表3）

1. はじめに
2. クラス全体の活動目標と運営ルール
3. 担当メンバー
4. 調査の概要
5. 調査結果
6. 調査結果をもとにした考察
7. 考察をもとにした提案
8. 調査活動の振り返り
9. 終わりに

#### ④連携活動の内容

特に尾山台商店街との連携領域に関しては次のような取り組みを実践した。

2011年3月に教員が尾山台商店街理事長と授業の運営・協力体制に関する事前打ち合わせを実施した。

6月6日には本学において企画提案会を開催した。尾山台商店街関係者にご参加いただき、1時間に渡り企画提案書をもとにした内容に関する評価や意見を受けた。

フィールド調査（街頭インタビューと焦点観察）は7月4日、10月3日、10月10日の3日間それぞれ13時半から16時半までの時間帯で実施した。学生の休憩場所として尾山台商店街会議室を借りた。街頭インタビューに関しては学生がペアになり、商店街を通行している方に協力のお願いのお声掛けすることにより3日間合計で98名の方にインタビューをおこなった。内訳は女性が64名、男性が34名、インタビューの所要時間は一人15分程度である。一人の学生が主にインタビューをおこない、もう一人の学生があらかじめ用意したシートにお答えいただいた内容を記録する方法で進行した（写真1参照）。学生は本学名を記載したプレートを胸につけていた。また、インタビュー終了後に協力のお礼として粗品（ボールペン）を差し上げた。

街頭インタビューの様子（写真1）



主な質問内容は、尾山台商店街の良い点、改善点、商店街への意見・要望、尾山台商店街までの交通手段、利用頻度、主な購入品、ポイントカードシステムの認知度・利用度、イベントの認知度・参加度である。

並行して学生による尾山台商店街の焦点観察もおこなった。学生一人ひとりが商店街全

体の雰囲気、利用者層、店員とお客様の交流面、安全面、環境・衛生面、表示物などに関して気が付いたことをあらかじめ用意したシートに記録していく方法で一人延べ2時間程度観察をおこなった。

12月12日には尾山台商店街理事長、理事2名、さらに東京都中小企業振興公社の方2名の計5名に出席頂き、本学にて調査報告会を開催した。約1時間半にわたり、調査結果報告書をもとに内容報告、その後意見交換をおこなった（写真2参照）。

調査報告会の様子(写真2)



#### 4.2 パソコン教室実践クラスの内容

##### ①テーマ

尾山台商店街向けにパソコン教室を実施する。

##### ②概要

尾山台商店街の二人の発注者の依頼に基づき、パソコン教室運営をグループにより実践するPBL活動をおこなうことである。

##### ③授業の進め方

本クラスは街頭調査実践クラスと同じように、3つのコースからの混成の、27名から構成された。それを4~5名の6つのグループに編成し（作業グループと呼ぶ）、6回おこな

うパソコン教室の授業をそれぞれが担当することとした。また、授業担当グループ以外の作業グループは、会場設営、受付、司会、広報、お礼状の五つの業務を分担しておこなった。

これらの業務内容を全グループが責任を持っておこなえるよう、6つのグループからリーダー、会場設営、受付、司会、広報、お礼状の各担当を決め、それぞれの担当ごとに新しいグループ（支援グループと呼ぶ）を編成した。この支援グループが、各業務の内容を話し合いで決めて、マニュアルを作成し、各回のパソコン教室の作業グループが利用することとした。街頭調査実施クラスと同じように、組織をマトリックスにするためである。

リーダーは、授業の前に教員を含めて打ち合わせをおこなって授業内容を確認し、リーダーを中心とした作業グループが、交代で授業を進行した。

パソコン教室終了後は、パソコン教室実施報告書と参加者名簿の作成および発注者への報告、学生の交通費精算、参加者へのお礼状作成と発送の仕事があり、パソコン教室実施後の次の授業で作業グループが分担しておこなった。

前期には、上記の作業グループと支援グループの編成、作業マニュアルの作成、授業の企画書の作成をおこない、5月9日にお2人の発注者を学校に迎えて企画提案会をおこなった。その結果を受けて、テキストの作成をおこない6月6日に第1回、7月4日に第2回のパソコン教室を実施した。

後期には、第3回～第6回のパソコン教室をそれぞれ10月3日、10月24日、11月13日、12月12日に実施した。

パソコン教室実施クラス授業日程表（図表4）

前期	授業日	授業項目	後期	授業日	授業項目
1	4月11日	前期オリエンテーション	1	9月26日	第3回テキスト作成・準備
2	4月18日	発注者企画提案会準備	2	10月 3日	パソコン教室第3回
3	4月25日	企画提案会運営資料作成	3	10月10日	パソコン教室振り返り
4	5月 2日	企画提案会リハーサル	4	10月17日	第4回テキスト作成・準備
5	5月 9日	発注者企画提案会	5	10月24日	パソコン教室第4回
6	5月16日	第1回テキスト作成・準備	6	10月31日	パソコン教室振り返り
7	5月23日	パソコン教室リハーサル	7	11月 7日	第5回テキスト作成・準備
8	5月30日	パソコン教室準備	8	11月13日	パソコン教室第5回
9	6月 6日	パソコン教室第1回	9	11月28日	パソコン教室振り返り
10	6月13日	パソコン教室振り返り	10	12月 5日	第6回テキスト作成・準備
11	6月20日	第2回テキスト作成・準備	11	12月12日	パソコン教室第6回
12	6月27日	パソコン教室準備	12	12月19日	パソコン教室振り返り
13	7月 4日	パソコン教室第2回	13	1月16日	個人・チーム活動の振り返り
14	7月11日	パソコン教室振り返り	14	1月23日	最終報告書作成
15	7月25日	前期授業報告書作成	15	1月30日	授業のまとめ

これらの授業日程を図表4に示す。

#### ④連携活動の内容

パソコン教室実施にあたっては、単に知識や技能を教えるのではなく、地域の方と学生のふれあいの場を作るよう、テキストとスクリーンを見ながら、講義形式で進めたものの、実際には1対1での個人指導が中心となるようにした。学生は自分のノートパソコンを会場に持ち込み、受講者の負担を軽減するようにした。受講生の習熟度にはかなりのばらつきがあったが、このような指導方法によって、それぞれの受講生に応じた速度で進められるとともに、丁寧に教える学生の対応に喜んでいただけたことが、アンケートの結果や、発注者に寄せられた受講生の感想からうかがえた。

また、90分の授業の間に、15分の茶話会の時間を設けた。受付で受講者から一人300円をいただき、前半の授業の間に受付担当の学生がお茶とお菓子を買いに行き、茶話会の運営をおこなった。茶話会では5~6人でグループを作り、自由に話してもらった。わずか15分ではあるが、お互いの家族の様子や、学生の就職活動の様子なども話題となり、普段あまり話す機会のない年代同士の、有意義な交流の場となっていることがうかがえた。

全6回のパソコン教室は、第5回（11月13日）を除き、尾山台商店街にある地区会館（尾山台図書館と同じ建物）でおこなった。第5回目は学園祭にあたり、受講生を本学に招いてインターネットの授業を実施した。地区会館ではインターネットが使えず、2010年

パソコン教室実施内容 (図表 5)

回	実施日	テーマ	授業内容	受講者数
1	6月6日	最初のパソコン	Wordの基本 (タッチタイプ・印刷・保存)	17
2	7月4日	楽しい案内書	Wordで図・クリップアート・表を使う	24
3	10月3日	広報誌を作ろう	段組で紙面を作り、テキストボックスでコラムを作る	24
4	10月24日	楽々家計簿	Excelの基本 (入力と計算式) とグラフの作成	17
5	11月13日	インターネットで情報を	検索の仕方と、天気予報・電車の乗り換えなどの情報収集	13
6	12月12日	写真とクリスマスカード	デジカメの写真の取り込みと編集、文字と写真を組み合わせる	19

度の受講生からインターネットについての要

望が多かったからである。

なお、前期末および後期末には、それぞれ約 50 ページに及ぶ実施報告書を作成した。

パソコン教室実施内容を図表 5 に、パソコン教室の様子を写真 3 および写真 4 に示す。

パソコン教室の様子 その 1 (写真 3)



パソコン教室の様子 その 2 (写真 4)



## 5. 取り組み成果に関する考察

### 5.1 学生の学習成果

本授業を通じた学生の学習成果は全授業日程終了後に課した期末レポート課題の学生自身の記述を通じて把握をしたい。「あなたは課題実践研究の学習を通じた学習成果として、どのような力を伸ばすことができたと考えるか」という設問を設定し内省化させ自分の言葉で記述させたところ、街頭調査実践クラス

では図表 6 のような結果となった（複数回答者有）。

街頭調査実践クラスにおける伸ばすことができたと学生自身が認識している力（図表 6）

<交流面に関する記述>	
・コミュニケーション力	16名
・自分の意見を伝える力	4名
・人前で発表する力	3名
・人の意見を聞く力	3名
・インタビューをする力	2名
<行動面に関する記述>	
・課題に真剣に取り組む力	3名
・積極的に行動する力	2名
・課題をやり遂げる力	1名
・率先して行動する力	1名
・自分の持ちまえを發揮する力	1名
・考えて行動する力	1名
<協働面に関する記述>	
・自分の役割に責任を持って取り組む力	3名
・メンバーとサポートし合う力	3名
・協力し合って課題に取り組む力	2名
・意識的に報連相をおこなう力	2名
・チームで仕事をする力	1名
・連携する力	1名
・相手の立場に立って物事を考える力	1名
・計画的に進める力	1名
<思考面に関する記述>	
・様々な視点から考える力	2名
・企画する力	1名
・観察する力	1名
<その他の記述>	
・報告書をまとめる力	1名
・パソコン力	1名

それぞれが自分の言葉で表しているため表現の仕方は多少異なるが、学生自身が伸ばすことができたと認識している力は大きく4つの領域に整理される。

一つ目は、コミュニケーション力に代表される他者との交流面に関する領域である。学生の記述の中では最も多い領域であった。

学外の方との交流面においては、初対面の人に勇気を出して声をかけ、意見に耳を傾け、本音に迫る意見を引き出すことが求められる街頭でのインタビュー場面はもとより、提案会・報告会における発表場面や年齢層の異なる発注者の方々との意見交換や運営調整場面

がある。また、クラス内においては他コースに属する初対面のメンバーと混合でグループワーク活動をおこなう必要があったため、自分の意見をしっかりと伝えていくことや他者の意見に耳を傾ける必要があった。これらの経験を通じてコミュニケーション力や傾聴力、伝達力などが伸ばせたと感じていると考えられる。

二つ目は行動面に関する領域である。机上の正課授業にありがちなダミーの課題や模擬ロールプレイングではなく、実際にそこで日々生活を営む人々が存在し、課題を抱え、悩み、解決の糧を求めてくる「生きた」テーマであることの価値は大きい。これに対し学生なりに真摯に受け止めた結果、真剣に課題に取り組まなくてはいけない、積極的に取り組まなくてはいけない、自分の力を充分に發揮して最後までやり遂げなければいけないという思いに駆り立てられた結果、それを完遂した段階で、本授業ならではの力を伸ばすことができたと感じているのではないだろうか。

三つ目は協働面に関する領域である。このクラスではグループ単位での活動を複層的なマトリックス組織でおこなう必要が出てくるため、どうしても多くのメンバーに働きかけていかなければ業務を進めていくことはできない。また、スケジュール調整や作業分担に関しては、他のグループの進捗状況が自分たちのグループの作業工程に影響をもたらすため、きめ細やかな報告・連絡・相談を必要とする。このことが、協働力の必要性を認識させ、伸ばせたと感じていると思われる。

たとえば、調査内容の報告会の開催場面だけを考えてみても、調査の集計・分析結果は主に調査分析グループがおこなうが、そのも

との資料になるのは4つの調査グループが得た情報であるため、期日までに基礎情報が整理されていることが求められる。また、調査分析グループがまとめた内容を盛り込む報告書を作成するのは、最終的に内容とフォームを統一し最終仕上げをおこなう報告書作成グループであり、こととの連携も不可欠となる。さらに、報告書は報告会運営グループの進行マニュアル作成にも大きな影響をもたらすため、その内容の適切な時機をとらえた提示も必要となる。必要備品の準備や発注者への連絡に関しては総務グループとの連携も出てくる。さらに、報告会においては各調査グループからの発表もあるため、個々の発表者との調整も出てくる。このように、スケジュールの進捗に合わせ連携をとり、各グループの仕事をオーバーラップさせながら業務を進めていかないと業務分担の狭間に落ち込み、抜け落ちてしまう仕事が出てきてしまう。

このような経験を通じて、自分の役割に責任を持ち、仲間とサポートをし合いながら取り組むことの大切さを体得したと思われる。

四つ目は、思考面に関する領域である。焦点観察やインタビュー結果の考察を通して、複眼的にものを見ることの重要性や、普段何気なく見過ごしていることがらに対しても、「なぜなんだろう、どうしてなんだろう」という問題意識を持って観察し、考えることができる力が身についたとの記述があった。

本授業の初期段階で何の先入観も持たずに尾山台商店街を見学におこなった段階では多くの学生が石畳のきれいな良い商店街だという平凡な見方をしていた。それが、調査を進める都度、そこに潜む課題や改善点があぶり出されていく過程を目の当たりにする中で、

深い観察力と様々な視点で考える力が伸ばせたと感じたと思われる。

本授業の学習目標に照らしたときに学生の学習成果としては、働くための基本能力のうちの「現場の課題を創造的に解決する力」に関してはまだ途上といわざるを得ないが、それを実現するための交流力、行動力、協働力、思考力の必要性を自覚させ、伸ばせたと考える。

一方、パソコン教室実践クラスにおいては、世代の大きく異なる地域の人に対して「教える」という作業を通して、普段とは全く異なる交流の仕方を試行錯誤しながら学ぶことができ、コミュニケーション能力を大きく伸ばすことができた。一方的に「教える」のではなく、本学の授業「人に教える実務学習法」や「学びのサポート」を通して、「お互いに学び合う」というスタイルを意識して、教えるという作業をおこなった学生が多かった。また、ホスピタリティをいつも意識して、笑顔を心がけ、積極的に話しかけ、また何度も同じことを繰り返して指導したことによって、相手から感謝され、自分のコミュニケーション能力が大きく向上したと感じている学生がほとんどである。

また、クラスを構成する3つのコースでは、それほどパソコン関係の授業が多くなかったことから、テキスト作成に長い時間を掛け、教えるための準備作業をていねいにおこなったことから、パソコンの基本操作の意味を深く理解できたという効果もあった。

さらに、パソコン教室というイベントを準備・実施するための、プロジェクト力やチームワーク力を身につけることができた。事前に、大まかな計画を立て、起こりうる問題へ

の対応策を考え、それらを学生全員が共有するのは、簡単なようで難しいことを、多くの失敗を通して学ぶことができた。特にグループのリーダーの全員がこの能力を大きく伸ばせたを感じている。

### 5.2 商店街における実践効果

一方、連携先である尾山台商店街にはどのような影響を与え、どのような成果をもたらしたのであろうか。この点についてそれぞれのクラスへの発注者である尾山台商店街理事長の安藤武彦氏と同IT委員長東出貴嗣氏にヒアリングをおこなった。

まず街頭調査実践クラスの活動に関しては、当初期待されていた「媒介者としての役割」と「客観的な視点」の側面を十分に果たしているという評価を得た。地域住民や買物客がこの商店街に対して抱いている思いや期待、意見を第三者である本学の学生を介して口頭のやり取りで対面収集できた意義は大きく、理事会等において、この定性情報が今後の商店街振興策検討のための貴重な参考情報になるとを考えている。具体的には、歩道が歩きにくいことの原因として多く挙げられる駐輪自転車問題を緩和させるために専用の駐輪場拡大の検討や、高齢者が安心して往来できるために歩行者天国の時間帯拡大などの検討事案の有力な根拠として活用されている。

また、尾山台商店街が近隣に所在する東京都市大学の通学路にあたり、その大学生が重要な潜在顧客と位置づけられる。しかし、彼らと同世代の本学学生による焦点観察結果から大学生など若者を対象とする店舗やサービス、掲示物などが少なく、その必要性が報告されたことは客観的な視点からの提言として

価値があるとの評価を得た。

当初期待されていた点以外でも良い影響を与えており、街頭インタビュー調査の実施は2011年度で3年目を迎えたわけだが、毎年ほぼ同時期に継続して実施していることが地域の住民の一部には認知されつつある。このことは尾山台商店街が常に商店街の改善に努力をしている姿勢や意欲を伝播させる効果があると評価されている。

また、商店主への刺激にもなると考えられている。毎年街頭調査をしているという事実は組合員に告知されているとともに、30名近い本学学生が街路でお客様に声をかけて調査をしていれば店員の目にも触れる。このことがお客様対応力の向上や個店の魅力アップの意識付けを喚起させる効果と、未加盟店に対して振興組合への加盟を働きかける効果が期待されている。

パソコン教室実践クラスにおいては、利用者に対するサービスとしての意味だけでなく、このような企画を実施し、それを全ての商店が協力しておこなっていることを、利用者に対してアピールすることで、大きな宣伝効果が得られている。

二次的には、通学路ではないため、これまで全く足を踏み入れたことのない学生が、何度も商店街を訪れたことで、さらに多くの利用客を引きつけるきっかけとなったことが、効果としてあげられる。

### 5.3 連携型授業を支える要素

このような地域連携型授業を実施するには、授業がおこなわれる場と、授業外においてそれを支えるサポート体制が必要になる。

授業の場における主な構成要素は、従来の

授業のように教員と学生ではなく、学生および授業で関わりのある地域住民である。地域住民は、街頭調査実施クラスにおいては、地域を通行する人であり、また打ち合わせや報告をおこなう発注者である。パソコン教室実施クラスでは、教室の受講者であり、同様に打ち合わせをおこなう発注者である。教員はむしろ、授業の場、調査の場にはいるものの、授業が進行している状態においては、直接それに関与しないことが求められる。

授業外における、サポート体制の主な構成要素は、地域の担当者・授業担当教員・協力しあう他の授業担当教員・支援事務部門である。

地域の担当者と授業担当教員は、前年度に次年度の授業内容やスケジュールの確認をおこない、授業の前後によく連絡を取っておくようとする。普段はメールで情報のやり取りをするが、パソコン教室実施後は、30分ほど振り返りや次回への課題などを話し合った。

本学の地域連携授業には、同じ商店街に対する、ポスター作成やホームページ作成などの授業が含まれており、パソコン教室のポスター作成においては、それらの授業担当教員との連絡が必要になった。また、それらの授業の学生同士も連絡を取り合わなければならない。

また、学生のパソコンが不足した場合に備えて、貸し出し用のパソコンを用意していたり、携帯用のプリンターも複数の授業で共有していたりしたので、使用的ルールを決めるために、複数の教員同士が打ち合わせをおこなう必要があった。

地域連携型授業においては、学生が学外で活動するために、保険の加入と交通費の支払

いが必要になる。また、授業内で使用する文房具等の消耗品の管理も必要になる。交通費の申請や消耗品の購入と支払いの申請は学生がおこなうものの、支払いの手続きは事務の担当部門にお願いすることになる。

このように担当教員は、学生だけでなく、地域の担当者、他の連携授業の担当者、事務の担当部門と、多くの情報交換をおこないながら授業を進めなければならないのが、地域連携型授業の特徴である。

## 6. 今後の課題

地域連携型授業を展開していくまでの課題について、尾山台商店街との連携実践を通して明らかになったことは3点ある。

一つ目は、地域の方が抱えている課題を学生一人ひとりが自らのものとして共有、理解し、テーマに真剣に取り組む意識付けを早期におこなう必要があるという点である。

「学生と教員」というシンプルな構成による学内授業に慣れてしまっている学生にとって、本授業の「学生と地域の発注者と地域住民と教員」という複層構造における自分達の位置づけを理解できないまま授業に参加している学生が散見される。初期段階では「なぜ、尾山台エリアに在住していない私たちがこのようなことをやらなければいけないのか」という疑問を呈する学生すらいる。計画段階から全員の学生が主旨と位置づけを理解し課題に取り組むための意識付けがおこなえる学習ステップが必要と考える。

二つ目は本授業の学習目標の達成度合いを客観的に図れる指標を構築する必要があるという点である。特に、「働くための基本能力」の獲得の程度を客観的に把握するためには達

成度指標をもとに、自己評価のみならず、学生の相互評価なども組み入れた検証が必要と考える。

三つ目は、この連携型授業を継続実施していくために、授業時間外での本学教職員と連携先キーマンとの情報交換機会をより一層増やし、コミュニケーションをさらに密にする必要がある点である。

地域と本学の連携により地域住民の方に提供されるサービスや情報収集機会は、継続されることによりその価値は高まることは前述の通りである。一過性のイベントとしてではなく、継続的な実践がおこなえるように、連携先キーマンとのコンタクト機会を増やし、変化する地域ニーズを把握すると同時に、学生の状況を伝えていくための情報交換活動が求められる。

R.M.エマーソン, R.I.フレッツ, L.L.ショウ.  
方法としてのフィールドノート 現地  
取材から物語作成まで. 佐藤郁哉・好井  
裕明・山田富秋訳. 新曜社, 1998  
尾山台商栄会商店街振興組合, 尾山台振興会  
商店街振興組合, 二葉会商店会, 尾山台  
東栄会. 尾山台駅周辺商店街振興プラン.  
2010  
財団法人世田谷区産業振興公社. 世田谷区の  
商店街に来て見てください！世田谷区  
の商店街 活動紹介. 2011  
ハッピーロード尾山台公式サイト  
<http://www.oyamadai.com/2012.11.29>  
閲覧

## 参考文献

- 小田隆治, 杉原真晃. 学生主体型授業の冒自  
ら学び, 考える大学生を育む. ナカニシ  
ヤ出版, 2010
- 喜多一. 大学教育とプロジェクトマネジメン  
ト. 国際 P2M 学会研究発表予稿集, 2006  
p.103-108
- 佐藤修. 大学における PBL 実現の課題. 日  
本情報経営学会誌, 2011 vol.32 p.3-8
- 前田瞬, 八鍬幸信. 情報経営教育における  
PBL の意義. 日本情報経営学会誌, 2011  
vol.32 p.54-65
- 望月謙二. 国語科教育と PBL 形式の授業.  
全国大学国語教育学会発表要旨集, 2004